

樋口一葉の見た明治の内外情勢

【プロローグ】

・明治初年から中葉にかけて樋口一葉(以降、一葉)は艱難辛苦の人生を歩んだ(明治5年～29年11月)ーその間、時代は「学制」施行・全国徴兵制」制定(明治5年)、「欽定憲法」発布(明治22年)、「日清戦争」(明治27年<1894年>～28年<1895年>)があった。市民生活は江戸時代の人情、風俗、習慣が未だ色濃く残っていた。急速な時代の流れに民衆は“時代の変化”を感じ取っていたが、唯々、時代の流れについていく以外に生きる術を知らなかった。

・国家強化策として「富国強兵」、「殖産興業」が推進され、日本は近代化の途を歩みだす。しかし、「日清戦争」、「日露戦争」(明治37年<1904年>～38年<1905年>)でロシアに勝利したことで日本は軍国主義が勃興した。しかし、日露戦争が薄氷を踏む勝利だったことをわすれられ、日本の力と勇氣は過剰に強調され伝えられた。昭和20年8月の太平洋戦争終結は日露戦争の神格化とおごりの中に胚胎している。元首相の石橋湛山は明治時代の意義について「政治、法律、社会の万般の制度および思想にデモクラチックの改革を行ったことにある」(東洋持論)。

【プロフィール】

(女戸主)

・一葉は明治5年3月25日<1872年5月2日>に生まれ、明治29年11月23日<1896年11月23日>亡くなっている。名は奈津/夏子とも自署。東京府第二大区小一区内幸一町一番屋敷、東京府内長屋(現:日比谷シティ)にて、東京府庁に勤務する樋口則義(43歳)、母たき(38歳)の次女として生まれる。明治20年長兄泉太郎、同22年父が相次いで亡くなる。次兄虎之助は家を出たため一葉は女相続戸主として母たきに仕え妹くにを守り、女3人で住まいを転々と変えた(生涯14回)。24歳8カ月(9千日)の短い生涯の間に22の短編と40数冊に及ぶ日記と4千首をこえる和歌の詠草(和歌の草稿)を残した。一葉が亡くなってから122年の歳月が流れた。



(学歴)

・学歴は1883年(明治16年)、11歳の時、青梅小学校高等科第4級(台東区上野2丁目「十三や櫛店」左隣)を首席で卒業した(11歳)。母は、女子は学問より手仕事(和裁など)を習得することが大切であると、上級学校への進学を断念する。1886年(明治19年)、父の知人の紹介で、中島歌子の歌塾「萩の舎」(はぎのや/文京区春日1丁目)へ14歳で入門している。

(萩の舎)

・有能な一葉は頭角を現し、時には師匠の師範代をつとめた。教場は12畳の座敷、表に俵(くるま)を待たせた名門の姫君令嬢(鍋島家)たちが紫の矢筈や黄八丈、お召しや糸織などその頃としては立派な身なりで、色とりどりの座布団に座っていた。その

前で「源氏物語」、枕草子などの講義をした。その中には安井てつ(東京女子大学創設者の一人/新渡戸稲造初代学長、第2代学長)がいた。身分の高い人が多かった。自然、身を寄せ合ったのが、“平民三人組”こと、一葉と伊東夏子、田中みの子の三人であった。後世の研究者はこの私塾を「明治の宮廷サロン」と称した。

(容 姿)

・一葉は、5尺足らず、髪は薄く、美人ではないが、目に輝きがあった。普段は鼻筋の通った瓜実顔(うりざねがお)にまるで白粉気もなく過ごしていた。きわめて小食、近眼で近くに寄らなければ相手が判らないくらいひどかった。肩こりがひどく、お灸、もみ療治に通った。洗濯、縫い物などの手内職、芝居へ行く余裕なかったが、時には妹・母親と寄席、寺社にお参り(摩利支天・徳大寺(御徒町))するなど街を散策した。

・士族の誇りを胸に、つつましく見えて時に大胆に、心根は優しく時に国を憂えた。「萩の舎」(はぎのや)において明治の最上層を、下谷竜泉寺の荒物雑貨屋経営で明治の最下層を見えた。平田禿木は一葉について、「容姿に於いては、一言にいえば紫式部ではなく、清少納言に近い。我々仲間ではブロンテ、ブロンテとよく女史と呼んでいたが、全くその通りであった。決して綺麗な人ではなかった。半井桃水は、一葉について、「どちらかと言えば低い身であるのに少し背をかがみ、色艶の好くない顔に出来るだけ愛嬌を作って、静粛に進み入り、三指で畏まって、ろくろく顔上げず、昔の御殿女中がお使者にきたような有様であった。詩人薄田泣菫は上野図書館で一葉を見ている一繊弱(きゃしゃ)で清しい声で、牛のような呆(とぼ)けた顔をしていた一。

【情報源】

(行動半径)

・一葉は幼年期と18歳から、人生の重要な10年余りは本郷で過ごしている。あとは成長期の8年半を下谷に、神田に1年ばかり、芝の兄の家に1年半、そして「たけくらべ」の舞台となった下谷区竜泉寺町にはたった9ヶ月……。ほんの少し、地上を這いずった感じである。

・その足跡を地図に展開すると、江戸城を中心に半径数キロに収まってしまう。しかも住んだのは城の北東。良(うしとら)といって江戸城の鬼門除かに天海僧正は上野に東叡山寛永寺を築いたが、一葉の住んだのもその方角に当たる。明治11年に成立した旧15区のうち下谷区、本郷区その辺りを中心に一葉は生きた。

(図書館)

・一葉は7つの頃から読書に夢中、その中でも「読みけるは、英雄豪傑伝、任侠義人の行為(ふるまい)」でした。つまり女らしい恋の物語よりは、世界を股にかけ「ダイナミックに動く男たちの生」であった。以下、一葉の知識欲の旺盛さは比類ないものがあった。

・一葉は最初の公共図書館である「東京図書館」(現:国際こども図書館)で多くのジャンヌの本を読んでいた。閲覧は有料で2銭であった。一葉日記の初出は明治24年6月10日、「朝より空くもる。2時頃より親友田中みの子さんと共に図書館に行く。6時帰宅する」。図書館は上野忍ヶ岡の西の隅(現:東京芸術大学の裏)にあった。とくに利用回数が多くなったのは竜泉町時代で、代表作「たけくらべ」の起点となった。

・一葉は図書館が狭い所なので、暑さも耐え難い所と思っていたが、実際は天井が高

く、窓が大きいので、吹き入る風が肌寒い程だったので、嬉しい思いでした。いつきても男子は非常に多いが、女子の閲覧者は殆どいないので不思議な気がする。書名を書き、分類番号など調べて、請求票を持って行くと、「間違っています。もう一度書き直してください」などと言われるので、顔は熱くなり体も震えるほどでした。

【借りた本】：太平記/大和物語/春雨物語/丈山夜譚/哲学会雑誌/奇々物語/くせ物語/昔々物語/各国漫遊記/雨中問答/乗合ばなし/宇治拾遺物語/西行撰集鈔(伊東夏子から借用)/艶道通鑑など5冊の本(田中みの子から借用)/春雨物語/丈山夜譚/昔々物語/くせ物C語/各国漫遊記/雨中問答/乗合ばなし/本朝文粹(もんずい)/雨夜のともし火/五雑俎/早稲田文学の中の文学/シルレル伝記/マクベス詳報/俳諧論/蜘蛛の糸巻/雑誌(萩野氏から借用)など。

(新聞情報)

・一葉は早くから社会への関心を日記に記述した一情報収集への旺盛さと執念は比類なきものであった。当時、新聞が唯一のメディアで一政治、経済、社会、国際ニュースが一葉の目に入って来た。国会新聞を取り出した明治26年5月11日から新聞記事による記述が多くなった。事例は以下の通りです。

〈国内情勢〉

明治24年の事件―①露国皇太子ニコライが滋賀県大津で警備中の巡查津田三蔵に切りつけられる事件(〈大津事件〉5月11日)。②小舟町2丁目石崎廻漕店所有の汽船石崎丸、小樽から東京向かって出帆したが、銚子沖にさしかかったとき、沈没し、乗組員50名、全員が溺死した・・・ともかく涙が溢れる物語でしたと(6月11日)。③蜂須賀茂韶(もちあき)が貴族議員議長となり、富田鉄之助が東京府知事になった(7月12日)。④大津事件の被告津田三蔵が肺炎で、北海道空知監獄で死亡したとある(9月29日)。⑤濃尾大地震(10月28日)、⑥樺山資紀海軍大臣(かばやますけのり)の軍備増強演説による議会紛擾(ふんじょう)事件(12月23日)。

明治25年の事件―①陸奥宗光農商務大臣が依頼免官となり、河野敏鎌氏が後任とのこと。陸奥氏は宮中顧問官に任ぜられた(3月14日)。②今朝の新聞を見ると内閣の様子は不安定のようだ。品川弥二郎氏は内務大臣の職を副島種臣氏に譲り、自分は宮中顧問官に転じたのを初めとし、あるいは後藤象二郎氏は通信大臣の職を辞したとか、またある大臣は辞表を呈出したとか、種々の情報が入り混じって混沌としており、新聞記者が得意の筆をふるうべきである時機と思われる(3月15日)。



③晴。一点の雲もない。本妙寺(本郷菊坂町82にあった)で種痘があるというので私も邦子も行こうと思って支度をする。私は「聖学自在」(新井白石)を読み、午後早々に秀太郎と共に種痘に行く。④火事の記録を詳しく記述されています―神田、猿楽町、小川町あたりが4000戸焼けたのはいわゆる神田の大火で、いまも記録されています(4月10日)。小石川の沢蔵司(たくぞす)が焼失する(8月26日)。

明治26年の事件―6月18日の日記には、「侠客駿河も次郎長死去(74歳)。本日葬

儀。会するものは千余名。上武甲の三州より博徒」の頭たちたるもの会する五百名と聞えたり」と面白いことを書いています。一葉にとって侠客博徒も英雄豪傑のうちに入るでしょう。7月14日、転居直前(本郷菊坂町69番地)に一葉は新聞を「国会新聞」から「東京日日新聞」(現毎日新聞)替えています。下谷に移ってから引き続き透水の小説を読みたい、という意識の表れです。この頃の「一葉日記」には触発された激しい“憂国の情”がしばしば吐露されている。それは新聞というメディアを持続的に購入することによって、何とか自己の立脚点を見失うまいとした心情の表れであった。

〈国外情勢〉

・阿片戦争以来(1842年)、明治の日本を取り囲む国際情勢は厳しくなりました。日本の為政者は列国動静を知るため軍人を使い、特に露西亜への情報収集を強化しました。一葉は詳細に以下の動きを記述しています。

明治26年—①この年一葉を心配させたのは郡司大尉成忠(しげただ)と福島安正中佐の動静です。郡司大尉は一葉も尊敬する作家幸田露伴の実の兄で、明治26年3月20日、90人余りを率いて千島樺太の開墾測量のための青森の鮫港を船出しましたが、暴風雨に遭い大尉の乗った三番艇は行方不明になりました。その刻々が記され、一時は行方不明とか。自決の報道もされました。その都度、一葉は一喜一憂し、「郡司大尉変死一条は誠に針小棒大の偽りにて小負傷をなしたるのみ」と5月31日にホットとして記しています。

②福島安正中佐の動静です。一葉は福島少佐のシベリア横断のその後の様子が判然としないという報道がありました。本当かどうか不安です(明治26年3月1日)。しかし、シベリアの情報収集のため明治25年2月からのシベリア単騎横断を終えて帰国し、上野不忍池畔の馬見所で歓迎式典が6月29日に行われました。一葉は母と一緒に見に行っています。「福島中佐が踏分けこしうらるの山は高かるべし、西比利亜の野は広がるべし」(7月12日)。一つの事業の困難を一葉は自分の文業に重ねたかもしれません。

(日清戦争)

・日清戦争は明治27年(1894年～95年)、日本と清国が朝鮮の支配権を争ったのが主因。27年5月、甲午農民戦争(東学党の乱)が起きる。同6月朝鮮政府は鎮圧のため、清国と、次いで日本に援兵を依頼。同6月12日、日本軍仁川に上陸、7月23日、ソウルの王宮を占領し親日派の大院君政権が誕生。6月25日、日本連合艦隊は清国軍艦と遭遇した。結末は日本が勝利し、両国は下関条約を締結する。

・日本は中国から朝鮮の独立の承認、遼東半島、台湾、澎湖島の割譲、賠償金2億両を獲得し、加えて、通商条約の締結、威海衛保障占領を取り付けた。条約調印後6日目の明治28年4月23日、ロシア、ドイツ、フランスからの「三国干渉」を受け、5月4日、日本政府は、遼東半島放棄を決定。この戦争により、戦死1132人、戦傷死285人、病死11894人、戦傷病3794人という多くの人的損害をだした。一葉は当時23歳、日記をみると、日清戦争について以下のように述べている。

・この時、一葉より19歳上の森鷗外は軍医として従軍した。何故か日記には戦況の記

述はなく、この頃一葉に国文学の教えを受けていた高等中学受験生穴沢清次郎は、5歳年上の一葉が「われわれ仲間では、少しも戦争なんて影響されませんね」（「一葉さん」）。明治28年4月16日、久しぶりに「水の上日記」の再開。「よ（夜）に入って、号外が来る。平和の談判ととのへり」。どきんとするのは「新領地」と題する次の歌がある。一敷島のやまとますらをにえ（贄）にして、いくらかえたるのこしの原一

・これは日清戦争によって領土とした台湾、澎湖島と、のちに三国干渉に返還した遼東半島を指す。一将功成って万骨枯れる。死者一万三千人余命。同朋の血をかくも流して、少しばかりの領土を得たところで……。たしかな目がうかがえる異色の一首。

【エピローグ】

・一葉の終の棲家となった本郷区丸山福山町の家（崖下）には『文学界』の若い人達が足繁く来ては、夜は徹して文学論をたたかわした。ほとんど毎日訪れていたのは平田禿木と馬場孤蝶、上田敏、島崎藤村、川上眉山、斎藤緑雨などで「サロン化」した。

・一葉が16歳で相続戸主となった明治21年（1888年）、伊東博文は47歳、明治天皇はなお若き26歳であった。伊東は渡欧して東洋初の憲法を研究してきた。欧米に伍して、近代国家をいかに創出すべきか、頭をふりしぼる。翌年、明治22年、欽定憲法（君定憲法）を發布した（1889年2月11日〈紀元節の日〉）。

・当時の一葉の「一葉日記」（〈身のふる衣〉〈まきのいち〉/明治20・1・15～20・8・25）みると、当時、一葉は和歌の稽古日なので「萩の舎」へ行っていた。生活拠点は街中で、日々貧しい生活を送っており、憲法発布の関連ニュースは雲の上のできごとだったのであろう。歴史の多くは支配者側から書かれており、そうであるならば民主の側からでないと見えない歴史があるはずです。支配者のいう民主の不満とは、民衆に言わせれば、“公平を求める正当な要求”にほかなりません。一葉は時には社会の不平等感について、悲憤慷慨を発していた。

（グローバリゼーション研究所）所長 五十嵐正樹

（資 料）

・高橋和彦著完全現代語訳、「樋口一葉日記」、1993年11月23日、発行所株アドレュー、初版第一刷発行。

・森まゆみ著「一葉の四季」、岩波書店、第7刷発行、2012年6月12日。

・関礼子著「樋口一葉」、岩波ジュニア新書469、第3刷発行、2016年2月6日。

・井上ひさひ著「樋口一葉に聞く」。文藝春秋、1995年12月12日。

・小池昌代解説「一葉のポルトレ」、薄田泣菫「たけくらべ」の作者、みすず書房、2012年6月22日。

・石月麻由子論文国文学「樋口一葉」一日記の領分/創作の場「日清戦争と樋口一葉」2008年8月号。

・2018年1月1日付「東京新聞」（社説）、2018年1月1日－「明治150年と民主主義」。